



ライネフェルデ団地（旧東ドイツ）  
（本文中に関連記事があります）

## 目次 / contents

### 人・まち・地域…………… 2

- ・新しい価値を創造するヨーロッパの団地再生 / 嶋崎雅嘉
- ・北河内4市リサイクルプラザ（愛称「かざぐるま」）が稼働しました / 小泉春洋・前田恭宏

### きんきょう…………… 7

- ・小学生と古民家を調査しました / 高坂憲治
- ・伊勢「外宮参道」で年末年始おもてなし実験！ / 原田弘之

### うまいもの通信…………… 9

- ・東舞鶴の伝統の味「ホルモン」 / 廣部出

### まちかど…………… 10

- ・五感がよろこぶ「石畳の宿」～愛媛県内子町～ / 高田剛司



ひと・まち・地域

# 新しい価値を創造する ヨーロッパの団地再生

大阪事務所／嶋崎 雅嘉

11月にヨーロッパの団地再生を視察する機会をいただきました。

今回の視察は、団地再生等のテーマに取り組んでいるコンサルタントや設計事務所等の13名のメンバーで企画され、ドイツを中心にオランダ、イギリスの団地再生等の事例を数多く見てきました。視察を通して見えてきた団地再生のポイントを3つ整理してみました。

## 団地再生の3つのポイント

1つ目は、「社会問題」としての団地再生の視点です。特にヨーロッパでは移民の受け皿として「団地」が機能していることが多く、社会問題化しています。

2つ目は、大胆なストック活用が付加価値を生み出すという価値観。団地ストックの再生活用のイメージは、年数が経ち半減したストックの価値を改善する程度の見られ方が多いですが、大胆な再生事業により、その価値は劇的に増すということを実感しました。場合によっては新築以上の価値、または新築とは違う価値が創造されるということがありうるということです。

3つ目は、住宅や空間（まち）に対する住民の関わりを増やす仕掛けの重要性。多くの団地は様々

な要因によって、バンダリズムや犯罪の発生に悩まされていましたが、その解決のキーワードは、住民の住宅やまちに対する関わりを増やすということでした。

## 社会問題としての団地再生

まず、1つ目の「社会問題としての団地再生」に関する事例をご報告します。

バルマメーア団地（オランダ）は、コルビジェの理想都市を体現した団地です。ハニカム型長大住棟により構成された空間構成がヒューマンスケールを逸脱し、治安が悪化したと言われています。今回、偶然にもツアーのガイドさんがこの団地に居住していた経験がある方で、生活実態の説明を交えて案内していただきました。その中で聞いたもっとも大きな問題は、オランダの植民地であったスリナムが軍事政権により独立したことにより、大量の移民がこの団地に流入したことです。

それまでは、中流階層が入居者の中心であった団地に、都市生活に慣れていない異文化のコミュニティが入り込んだことにより、犯罪やバンダリズムの発生が多くなっていったそうです。

バルマメーア団地の治安の悪化はこのように、空間構成の失敗ではなく移民政策の影響も色濃く



バルマメーア団地の長大住棟



ノイス・エルフタル団地のコミュニティセンターの取り組み

出ています。

バルマメーア団地では、住棟の分節化、撤去、センター地区のリニューアルなどによりその再生を進めていますが、今回、移民問題に対する一つの答えだと考えられるのは、ノイス・エルフタル団地（旧東ドイツ）におけるコミュニティセンターを拠点とした多文化・多世代の交流促進の取り組みです。

ノイス・エルフタル団地では、キリスト教系の団体がその再生に積極的に関与しています。その団体により地域のコミュニティセンターの運営がされており、子育て層の昼食会や青年層のスポーツ大会、カルチャースクールの開催、同文化の移民コミュニティによる「フェスティバル」の開催など、地道な取り組みを積み重ねています。視察した実感としては、この取り組みによって、ノイスエルフタル団地のコミュニティは比較的安定していると感じました。

犯罪の温床となる空間の排除は必要ですが、移民問題などのコミュニティの課題に対応するには、地道なソフト対策が最も重要だと感じた事例です。

#### 大胆なストック活用が付加価値を生み出す

2つ目の、「大胆なストック活用が付加価値を生み出す」事例をご報告します。



ライネフェルデ団地 減築事例

団地再生事例としてその減築手法が有名になったライネフェルデ団地（旧東ドイツ）では、コンクリートパネル工法の住棟ストックを活用して、まるでパズルのように様々なバリエーションのストック再生を実施しています。その中でも、再生により価値の高まった事例を2つご紹介します。

1つ目は長大な5階建て中層住棟の上層階を除却して、さらに分節化することで、「ポイントハウス」と呼ばれるグレードの高い住宅として再生された住棟です。幸運なことに住民の方に部屋まで上げていただいたのですが、採光が十分取られ明るく快適な暮らし振りが感じられました。

2つ目は、まだ実験的な段階のようですが、除却したコンクリートパネルを活用して戸建て住宅を建設した事例です。住宅ストックをここまで活用してバリエーションを増やすアイデアには感服します。これらの事例は、古いものを大切に使うというよりも、新しい価値を創造することが重要視された発想からでないと生まれてこないものだと感じます。

ドイツと日本では法や基準が異なるため、課題はあるでしょうが、ストックを活用して新たな付加価値を創出する価値観が、今後の日本の団地再生や住宅ストックの活用促進の面で必要になって



ライネフェルデ団地 除却したパネルで作られた住宅





くると感じました。

また、ベルリンの旧市街地にある高齢者のための住宅は、古いアパートのとなりに新しい住宅を建て、その間に生まれた細長い空間をスロープを巡らせたアトリウム空間を形成しています。スロープはなだらかな板張りでつる性植物が成長する暖かく居心地のよい空間となっています。古いものを活かしつつ新しいものと組み合わせることにより、個性的で付加価値のある空間を作り出しています。

#### 住宅や空間（まち）に対する住民の関わりを増やす

3つ目の、「住宅や空間（まち）に対する住民の関わりを増やす」事例をご報告します。

「関わりを増やす」ということは、言い換えると「自分の場所・空間として認識する」ということです。ランウェルロード団地（イギリス）は、スーパーブロックに中層住棟が配置された街区構成の団地でしたが、街路を通すことにより、街区を細分化するとともに、街路沿いに不必要な空間（例えば、利用度の低い緑地など）が配置されることを許さず、街区に対して生活観が滲み出すような低層住宅の配置や専用庭の整備を進めました。

同じくモーツァルト団地（イギリス）では、住棟間を接続する空中歩廊を撤去し、住棟単位のコンパクトなまとまりを重視しています。



ベルリンの高齢者アパートのアトリウム空間

また、先に紹介したノイスエルフトル団地などいくつかの団地では、賃貸住宅の払い下げによる住宅の持ち家化や、テラスハウスなど低層住宅への建て替えなどが行われています。

このように、「通りに対する表情づくり」「無意味な空間の排除、専用庭の整備」「住宅の持ち家化」「空間やコミュニティをコンパクトなまとまりにする分節化」など、様々な手法により、住民のまちや住宅に対する関わりを増やしています。

もちろん、空間的な視点だけではなく、コミュニティ活動の促進により、まちと住民の関わりを増やすことも重要な視点です。

#### 日本でも団地再生が進められるか

ここで紹介できなかった団地もいくつかありますが、それぞれの団地の特徴や社会背景などから、その再生手法や進め方は様々です。しかし、ここで整理した3つの視点をはじめ、「環境への配慮」「団地イメージの向上」など、底流にある考え方は、今後の団地再生を検討する上で参考にすべきだと考えます。

日本においても、今後、スクラップアンドビルドの建て替え事業や単なる補修だけの維持管理だけでなく、既存ストックを活用しつつ「新しい価値を創造する」という目的意識と柔軟な発想で団地再生事業が進められることを期待したいと思います。



ランウェルロード団地  
通りに面した空間が「自分の場所」としてきれいに飾られている

北河内4市リサイクルプラザ  
 (愛称「かざぐるま」) が稼働  
 しました  
 大阪事務所／小泉春洋・前田恭宏

## はじめに

アルバックでかねてからかかわってきた北河内4市リサイクルプラザ(愛称「かざぐるま」所在地:寝屋川市)が紆余曲折を経て今年(平成28年)の2月から本格稼働しました。当初、北河内5市(現在の枚方市、寝屋川市、四條畷市、交野市に守口市が加わる)で容器包装リサイクル法にもとづく「その他プラスチック製容器包装」の共同処理施設の整備の構想が持ち上がった平成13年度の時点では、平成17年度に稼働の予定でした。

しかしその後、門真市との合併の話があがった守口市が一部事務組合の構成市から抜けました。また、プラスチック製容器包装の圧縮をする施設には東京都杉並区の廃棄物中継施設の周辺地域で発生した杉並病のような健康被害が発生する危険が懸念されることとして、寝屋川市民を中心とした反対運動が起こりました。さらに、国からの廃棄物処理施設への補助が国庫補助金から循環型社会形成推進交付金へ切り替わった時期であったことや、焼却施設の広域化も絡めた整備にするべきだといった議論も加わり、交付金(最終的には国庫補助金)を受けられることが決まった時には、平成18年3月になっていました。

## 反対運動

健康被害の恐れから、町田市、長野市等に続いて、ここでもリサイクルプラザに対して反対運動が起こりました。このため、北河内4市リサイクル施設組

合は、平成16年度に専門委員会を立ち上げました。委員として、反対派から推薦された学識経験者も加え、プラスチック製容器包装の圧縮梱包により多種多様な揮発性有機化合物(以下、「VOC」)が発生するのかなどを検討を行いました。

VOCは、揮発性を有し、大気中で気体状となる有機化合物の総称であり、塗料、印刷インキ、接着剤、洗浄剤、ガソリン、シンナーなどに含まれるトルエン、キシレン、酢酸エチルなどが代表で、それらは大気中の光化学反応により、光化学スモッグを引き起こす原因物質の1つとされています。このため、平成18年4月からは大気汚染防止法により排出量が多い業種で規制されることになりました。

反対派の主張は、高圧力でプラスチックを圧縮した場合に、高分子の結合が崩れラジカル分子が発生し、化学反応が起こり、有害化学物質が発生するという内容でした。このため、高圧縮することによりどの程度のVOCが発生するのか、また、そのリスクを下げる手法について検討する専門委員会へのデータ提出のため、アルバックは圧縮試験の一部を担いました。専門委員会は、施設整備に当たって活性炭吸着塔を設置し、有害化学物質からのリスクを低減させること及びモニタリングや活性炭交換の情報公開を行うことを結論として、平成17年3月に報告書を取りまとめました。この報告書は、北河内4市リサイクル施設組合のホームページに掲載され



建物外観



手選別コンベヤ



リサイクルの学習ができる啓発施設



ており、全国の同様な施設の推進派・反対派に引張りだこになっています。

#### 北河内4市リサイクル施設組合ホームページ

URL:<http://www17.ocn.ne.jp/~recyclek/index.html>

#### 施設整備

専門委員会の結論も出たため施設整備に向けて準備を進めていきましたが、なかなか国からの交付金が認められず1年間終わろうとした平成18年3月に、ようやく国から施設整備への補助の内示が出ました。

さて、いよいよ施設整備に向けた入札の段階になりましたが、プラントメーカー各社は談合のため全国的に指名停止になっており、入札に参加できるプラントメーカーがあるかどうかの問題になりました。入札の時期によっては参加メーカー数の確保ができず、入札を延期した市町村もあるようです。しかし、平成18年6月には、リサイクルプラザの整備に実績のある新明和工業(株)が落札し、ようやく施設整備に向けてスタートが切れました。

設計と施工を新明和工業(株)が行い、アルパックは施設組合の発注仕様書と設計内容の整合性の確認及び工事監理を担当しました。

建物は工場棟と管理棟に分かれ工場棟は4階建てで鉄筋コンクリート造一部鉄骨造、管理棟は鉄筋コンクリート造3階建てです。

管理棟は1階が施設組合事務室、2階が啓発施設、3階が研修室となっています。3階で工場棟と渡り廊下で連絡されて工場内の見学者通路とつながり工場の作業内容を見学できるようになっています。啓発施設は小学生がゲーム感覚で楽しくリサイクルの内容を学習できるようになっています。

工期は約1年でしたが、昨夏は異常な高温が続き炎天下での作業は厳しく2月の稼働に向けて懸命の

作業が続けられ工期内の完成にこぎつけました。

施設組合では、施設整備に伴う情報の公開を行うため設計着手時から完成まで毎月1回周辺自治会の参加した住民協議会を開催し、設計の内容、工事の進捗状況等の情報を公開し、また住民の方々の意見を取り入れて設計・工事を進める方式が取られました。施設の愛称も4市の住民から公募し500通を超える応募があり事務局で整理を行った後、住民協議会で決定されました。

#### おわりに

このような経過を経て「かざぐるま」は今年の2月から稼働しました。アルパックでリサイクル施設関連の業務に関わったのは二つ目となります。もう一つは、施設整備ではありませんが、市民啓発施設(門真市リサイクルプラザ エコ・パーク 平成14年4月オープン)の市民運営組織づくりで、おそらく全国でも2~3番目となるNPO法人による市民運営組織(NPO法人リサイクル活動機構かどま)の立ち上げの支援を行いました。

これらの施設はリサイクル施設とはいうものの、一般的には周辺住民にとっては自分の家の近くには建設して欲しくない施設です。特に、「かざぐるま」は現時点で周辺住民全てに受け入れられているとは言いきれません。施設整備の根拠は国の定めた容器包装リサイクル法であり、また、広域化も国の基本方針です。これに沿って事業を進めてきた北河内4市は自己負担のもとに、専門委員会の開催や圧縮試験等を行ってきましたが、今後、国の支援の必要性も強く感じられます。



## 小学生と古民家を調査しました

大阪事務所／高坂 憲治

昨年12月、兵庫県篠山市福住地区の福住小学校6年生12人と共に、福住地区の古い民家の実測調査を行いました。

篠山市篠山城下町は、江戸時代の茅葺の武家屋敷と妻入商家群が美しい町並みを形成し、平成16年12月全国で63番目の重要伝統的建造物群保存地区に選定されました。平成17年度からこれらの修理事業が続いています。

江戸時代、篠山藩は篠山城下町と京の都を結ぶ京街道が整備されると、追入、福住、古市の3ヶ所を宿場と定め、中でも東の入り口である福住には宿として最高の格式をもった「本陣」を置き、以降福住は多くの商家が軒を並べ栄えました。

福住地区は、7つの集落が旧京街道に沿って線状に商家と農家が建ち並び、後背地を形成する田畑や小河川、山並みと一体となって、優れた歴史的景観を創り出しています。

篠山市は、こうした優れた景観を後世に伝えていくために、城下町に続き伝統的建造物群保存地区の指定をめざして保存対策

調査を行うこととし、アルパックでは城下町に続いて調査を担当させていただいています。

保存対策調査では、古い民家を1軒1軒実測調査を行い記録していきます。

今回はその保存対策調査の一環として、地区の中にある福住小学校の6年生と一緒に実測調査をする試みを行いました。福住地区は、篠山市と京都府の境にあって地区の人口減少と高齢化が進んでいます。小学校は1学年平均10数人で生徒数も減少し、町に出た若者はなかなか戻ってきません。校長先生と相談して、もうじき卒業して中学校に行く6年生12人に手伝ってもらうこととしました。

まず教室で福住の町の歴史や特徴について話し合いました。子供たちは親の世代で世帯分離し、新しい住宅に住んでおり、古い民家にはおじいちゃんやおばあちゃんが住んでいます。古い民家の暮らしについてはあまり知らないことがわかりました。

12月中旬、福住の古い典型的な農家のご協力を得て、12人を3人一組4班に分け、アルパックの所員がお手伝いをして、母屋、離れ、庭の間取りや配置をメジャーを使って測定して記録しました。

一通り間取りの測定をした後、90歳になる農家のご主人を囲んで、いろいろなお話を伺いました。

この経験は私たちにとっても刺激的な経験でした。最初に簡単に間取りの測定方法を教えたのですが、子供たちはすぐに要領をのみ込んで、積極的に取り組んでくれました。黒光りする大黒柱や大きな梁、裏庭まで続く土間やあらわしになった小屋組みなどに、私たちの想像以上に興味を示しました。何より子供たちの目の輝きが印象的でした。

子どもたちはやがてこの町を出て都市に住むようになるかもしれませんが、自分たちが育ったまちや生活、環境を語ることができることを確信することができました。

篠山城下町は今年築城400年を迎えます。お城だけでなく、時代を支えた地域が子供たちと共に、新たな歴史を刻むことを期待し、今年度も伝統的建造物を活かした福住のまちづくりに取り組みたいと思っています。



福住の町並み



お話を聞く



大黒柱の測定





## きんきょう

### 伊勢「外宮参道」で年末年始おもてなし実験！

大阪事務所／原田 弘之

少し前の話になりますが、みなさんは今年はどこで新年を迎えられましたか？私は、仕事ではあったのですが、はじめて伊勢で迎えました。

伊勢と言えば、最近話題にと欠かないですが、やはり伊勢神宮でしょう。伊勢神宮には、ご存じのとおり、内宮と外宮があります。内宮は日本国民の総氏神とあがめまつる天照大御神をおまつりしており、今から約2,000年前に現在の地にご鎮座したと言われていています。

#### 外宮は何をおまつりしているの？

一方、外宮は豊受大御神とようけのおおみかみをおまつりしていますが、こちらは何の神様かご存じでしょうか？

「食」さらには「産業」の神様です。約1,500年前に、天照大御神のお食事をつかさどる神として、丹波の国からお迎えしたとされています。毎日朝夕2回、天照大御神に神饌（食事）をたてまつるお祭りがご鎮座以来、一日も絶えることなく行われています。しかも、その食材は、基本的に神宮地内で栽培されたものだそうです。実は「イセヒカ



しめ縄飾り（¥2,000）：魔除けと招福のために玄関に飾ります。伊勢では1年中飾っておく習慣があります。

り」といったお米の品種もあります。これにもかかわらず、今回実施したアンケート調査によると、外宮参拝者のうち、上記の「外宮が何の神様か」知らない人が、なんと伊勢市民以外で5割近く、市民でも2割でした。

#### 20年タームで変わるまち

伊勢は、典型的な聖地型の観光都市と言え、年間約600～850万人の参拝者が訪れています。数字に幅があるのは、20年に一度神宮を建て直す「式年遷宮」があるからです。すなわち、20年タームで来訪者の波が訪れます。さらにまちづくりや道路整備もそれが節目になったりします。大げさに言えば、「20年タームで変わるまち」かもしれません。

現在、内宮は、門前町であるおはらい町やおかげ横丁もあって、かなりのにぎわいを見せています。一方、外宮は、伊勢市の玄関である「伊勢市駅」が近くにあるにもかかわらず、正式な参拝順が「外宮→内宮」ということや、「内宮」だけお参りする人もおられ、参拝者が減少しており、その門前である「外宮参道」はにぎわいが少なくなっています。

#### 外宮参道おもてなし実験

そうしたこともあり、地元の市民団体が連携し、この年始年末



古代米「五穀豊稷米」（¥500）：お米のルーツである黒、赤、緑、白の4種類の古代米と、家庭の米を混ぜて5種類のブレンド米として食します。

（大晦日の深夜）の参拝者向けにおもてなしの実験を行い、私はそのお手伝いをしました。目的は、外宮にちなんだ試作した特産物の購買意向を探ること、そして外宮参道にどんな機能がほしいか探ることです。試作品ラインナップは以下の写真をごらんください。いずれも「食」と「縁起担ぎ」をコンセプトにし、ネーミングやラベル等のデザインも工夫を加えています。

大晦日の深夜ということもあり、売り上げは、大いに苦戦しましたが、アンケート調査をみると、関心・購入意欲ともに高く、名物販売や食事の場、カフェなどを望むとの意向が高くなっていました。この結果、空き店舗を借りて住民や来訪者が気軽に集える「まちの駅」的なものを設置しようと地元でも動き始めました。

#### メッセージ発信型のまちづくり

外宮参道の団体の代表の方いわく、全国から「外宮」にお参りに来た方を気持ちよいおもてなしをし、「外宮」が持つメッセージを伝えたい。それが、伊勢に住んでいる、外宮のそばに居る者の役目だと。「外宮名物」や「まちの



稲ドライフラワー「恵みの稲穂」（¥300）：玄関に「しめ縄」を、家の中に「稲穂」を飾り、稲の持つパワーにあやかりましょう。





日本一の清流宮川の水「森の番人」(¥150):大台ヶ原の原生林が育んだミネラルたっぷりの水です。これでお米を炊くとよりおいしい。

駅」はその手段であり、結果的に、「外宮」への参拝者が増えていけばよいとのこと。伊勢は平成25年に第62回式年遷宮を迎えることから、これからますます盛り上がる5年間になります。

「食」をとりまく日本の状況を見ると、安全・安心、食料自給、食品ロス、健康など、どの面をみても、非常に厳しいものがあ

ります。一方、日本は非常に優れた食文化を持っているのも事実です。こうした時代だからこそ、外宮から「食」に関するメッセージを発信することは大きな意味があるのではないかと思います。また、それに対応することが、今後の「外宮参道のまちづくり」に期待されるものではないかと思います。

## うまいもの通信



**東舞鶴の伝統の味「ホルモン」**  
 =またしても食えなかった編=  
 京都事務所／廣部 出

突然ですが、ブラウってご存知ですか？

ブラウというのは、農業用の耕起用具で洋犁(すき)のことです。もし円盤がいくつもついた農業機械をご覧になったことがあれば、ソイツが円盤ブラウです。その円盤の古いヤツをひっぺがして鉄板代わりにして肉を食べるとい話をずっと以前に聞いたことがあります。貧相な食生活のさなかでしたので、実にウマソウだと妄想に歯止めが掛からず、確か2リットルくらいは涎を垂らしていたはず。

さて、今回ご紹介するのは、真ん中に取り付け用の穴こそないものの、似たような浅い楕円鉢状の厚手の鉄板鍋で炊くホルモ

ンです。何年も前に仕事のついでに立ち寄って以来、東舞鶴といえばホルモン。元祖だか本家だかの肉じゃがよりも、私の心に響き続けているのは、舞鶴伝統のホルモンなのです。

甘辛い独特の味付けで炊いたホルモンと野菜。メにうどん。ウマイ。

当記事には何気ない東舞鶴の街角のスナックを添えています。そこに写っているかもしれないお店です。昔、海上自衛隊の合同演習があったりなんかすると大変な行列ができていたそうです。最後に訪れた一昨年の夏には二代目(?)が味を守ろうと頑張っておいでで、当時の名物おばちゃんは店先でニコニコされていました。

さて「またしても食えなかった」理由ですが、どうにもお店

が開くのが夕方なのです。で、順当な特急利用で終電は執筆時現在で18:48発。キビシイ。確かに世の中にはホンマモンの終電というものが存在していて、東舞鶴発21:57なのですが、京都着は00:03。さすがにこれはちとツライ。なので、事実上、宿泊できる時だけがアイツを食せる僅かなチャンスなわけ。そしてなんと、今年は新年早々チャンス到来!東舞鶴に泊まりの調査があったんですよ!

……でもね、新年早々過ぎたんです。がっくり。



写真は本文とあんまり関係ないに違いありません



## 五感がよるこぶ「石畳の宿」 ～愛媛県内子町～

大阪事務所／高田 剛司

愛媛県喜多郡内子町には、国の重要伝統的建造物群保存地区に指定された八日市護国の「町並み」があり、また、大正5年の創建で、歌舞伎などの公演が行われる木造二階建て瓦葺き入母屋造りの「内子座」があることで全国的に有名な観光地です。この内子町には、もう一つの顔として、およそ20年前から「村並み」運動が展開されている「石畳地区」があるのをご存じでしょうか。

石畳地区は、内子の市街地から車で約20分の棚田が広がる山村地域です。住民有志によって組織された「石畳を思う会」によって、地域の象徴である水車を平成2年に自分たちの手で復活させました。このような地元の動きを受け、町は、地区内の古い民家を移築して、農村体験宿泊施設「石畳の宿」を平成6年にオープンしました。

近年の観光においては、地元との交流や体験型の活動が魅力ある素材として注目されています。また、受入側では地域活性化のために積極的に観光振興に力を入れ、農家のビジネスチャンスを増やそうとする動きがあります。その結果、規制緩

和も手伝って、全国各地で農家民泊が一つの手段として取り組まれるようになってきました。その意味では、農家の主婦が宿泊施設の運営を担い、やりがいと副収入を得ることのできる仕掛けをつくった内子町の「石畳の宿」は、全国的に見ても先進的な取り組みではなかったかと思います。

さて、ここでの宿泊者の楽しみは、何と云っても五感（視覚、聴覚、触覚、味覚、嗅覚）を存分に働かせることができる点です。昨年11月末に、この「石畳の宿」を訪れましたが、戸外に出て山や棚田の景色を眺めたり、夜には満天の星を見上げ、山間の静寂や凜とした寒さを全身に感じることができました。建物の中に入ると、囲炉裏で炭火をいじり、そのほのかな明るさや、やわらかな暖かさを感じながら、ゆっくりとした時の流れを楽しみました。

そして一番の魅力は、地元の食材で作られたおいしい(!)田舎料理と農家の方との談笑です。少し照れながらも、お手製の料理の一つひとつを丁寧に紹介してくれるお母さん方のもてなしは、心に残る“お土産”になるだけでなく、旅行の楽しさを倍増してくれました。皆さんも機会があれば、訪れてみてはいかがでしょうか。



地元で採れた山菜の色鮮やかな天ぷら



囲炉裏のある板間



石畳の宿

## アルパック(株)地域計画建築研究所

<http://www.arpak.co.jp> E-mail [info@arpak.co.jp](mailto:info@arpak.co.jp)

本 社

京都事務所 〒600-8007 京都市下京区四条通り高倉西入立売西町 82

大阪事務所 〒540-0001 大阪市中央区城見 1-4-70 住友生命 OBP プラザビル 15F

名古屋事務所 〒460-0003 名古屋市中区錦 1-19-24 名古屋第一ビル 8F

東京事務所 〒160-0001 東京都新宿区片町 1-20 萩原ビル 3F

九州事務所 (株)よかネット 〒810-0802 福岡市博多区中洲中島町 3-8 福岡パールビル 8F

TEL(075)221-5132 FAX(075)256-1764

TEL(06)6942-5732 FAX(06)6941-7478

TEL(052)202-1411 FAX(052)220-3760

TEL(03)3226-9133 FAX(03)3226-9560

TEL(092)283-2121 FAX(092)283-2128